

藝文

第拾九年第八號

濁音の用法

大島 正健

我等の祖先は清朗なる音を好み、濁濁なる音を嫌ひたるものと見え、古言の用法を見るに、其頭音には濁音を用ゐたる例に接すること至つて稀なり。されど近代語には、頭音の清濁を以て、事物の強弱大小の別を示す用法あるを見れば、古言にも同様の用法ありたるべしと想像すること、自然に起る所の推測なるべし。現代語にては、清の方は弱音濁の方は強音を表はす。

カンカン	ガンガン	カラカラ	ガラガラ
カタカタ	ガタガタ	キリキリ	ギリギリ
コンコン	ゴンゴン	コロコロ	ゴロゴロ

濁音の用法

藝文

バラバラ バラバラ バリバリ バリバリ

バタバタ バタバタ ボンボン ボンボン

ボタバタ ボタバタ ボロボロ ボロボロ

テンテン デンデン トントン ドンドン

チヤンチヤン チヤンチヤン チヨキチヨキ チヨキチヨキ

サクサク ザクザク サラサラ ザラザラ

スルスル ズルズル

右の例の中半濁波行音は、清の方に置く。

清濁は又勢の強弱を示す。

クルクル グルグル タラタラ ダラダラ

トロトロ ドロドロ

清濁は又年齢の差異を示す。

チチ(父)、 チヂ(爺)、 ハハ(母)、 ババ(婆)、

小兒の歩行をヨチヨチ、老人の歩行をヨヂヨヂと言ふが如きは、中間にある清濁の音の勢の強弱を示す例と爲る。

頭音より移りて、是より中節下節に現はるゝ濁音の用法に就いて考査すべし。此の緊要なる問題は、人の注意する所無く、等閑に附し來られしが、濁音の作用に由り、新義を有する新語の増加し、我語彙の豊富に成り來りしを證明するは、語學者の一人として筆者の大いに其責任を感ずる所なりとす。

濁音の挿入は、本語に勢を添へたる新語を生じ、又啻にそれのみならず、其義を轉じたる新語を生ず。

ヤル 破。

軟かき物に對して言ふ。

ヤブル 破。

硬き物に對して言ふ。

クユル 崩。

水力に對して言ふ。

クヅル 崩。

一般の物に對して言ふ。

ツユル 潰。

水氣ある物に對して言ふ。

ツブル 潰。

一般の物に對して言ふ。

クツル 朽。

クダクル 碎。

クダクの類語にクジク(挫)あり。

濁音の用法

コハル、
コハス、
毀。

コボツ 毀。強く破る。

コボツの類語に、コボル、コボスありて、缺潰の本義なりしが、溢落の義に移る。

ホル 堀。

ホヅル 穿。

クル 穿。

クヅル 抉。

コヅル 強く抉る。

ヨル 縫。

ヨヂル 振。

カム 嚙。

カヅル 齧。

ウムル 埋。

ウヅムル 埋。

アクル 開。

アバク 發掘。

サク 裂。

サバク 捌判。

アル、 荒。

アバルル 暴行。

ウル 得。

ウバフ 奪。

シムル 締。

シバル 縛。

シボル 絞。

キツラ(奴等)のヤツの下にバを入れて、ヤツバラと呼ぶが如きも、語勢を強むる用法なり。

濁音は強き音響に對する、反應の語意を表はすに用ゐらる。

オドル 躍。飛び上り、飛び下がることなり。

ヲドルの用例ありと雖も、ヲの假名誤なるべし。ヲにては字義説明し難し。

オドロク 驚。

オヅル 怖。オト(音)を活かしたる語なり。

オドス 威嚇。オヅルの他動形なり。

オンル 恐。同じく音より出でたる語なるが如しと雖も、清音なるは異例なり。

濁音は本に逆行の語意を表はすに用ゐらる。

モトル 戻。道に反くことなり。按ずるにトの原音は濁音にして、モトルはモドルなりしなるべし。左に非ざれば、他の類語と相合はず。

モドク 抵牾、批判の意を表はす。原意に逆らふなり。

モドカシキ、モドクより出でたる形容詞なり。抵牾すべき、批判すべき。モドク思に驅らるゝ心の苛らだたしき。其れよりモドカシキは覺束無き義混ら

はしき義に移り、モドキはマガヒ(擬)と爲り、雁モドキなどといふ語出で来る。モドル、元に還るなり。前のモトルに當てたる戻の字を再び此語に當つ。因つてトの濁音を有てるモドルは一語にして、反くと還るとの兩義あるを悟るべし。戻の清音にてモトルと爲りしは、後世の讀方なるべし。

モドスはモドルに對する他動形なり。

濁音は不快の感又鈍感を表はす語意に用ゐらる。

イブル 燻。頭音のイには、格別の意味あるを覺えず、故に之を語根として取り扱ひ難し。濁音のブは弱き火力に伴ひ起る、ブスブスといふ音などより取りたるものなるべし。イは之を滑かにするために添はりたる接頭語にして、イブル、イブスといふ語の生じたるものならん。

イブカル 訝。怪しむなり、疑ふなり、其本義は烟を通して、仄かに見るることなるべし。イブカシキは、イブカルより出でたる形容詞にして、不審の義なり。

イブセキ 悒。覺束無き、幽鬱なる、見榮無き

イビル 烟責にする、苦しむる。(俗語なり。)

ケブル 烟。火の氣よりケの音を取りて、之を活かしたる動詞なりとして、説明し

たるも、見ゆれどいかが。按ずるにケはキエ(消)の約、ブルはイブル(煙)の約にて、キエ、イブルの約りたる語なるべし。ケブリは消えんとする弱き火より立つ者をいふことゝ爲る。ケムリはケブリの轉なり。ケブキ、ケムキは煙の形容詞なり。クスブル 煙。低き火力にて燃やし、煙を立たす。クスクスと燃ゆる音のクスを取り、之に濁音ブルの語尾を添へて作りたる語なるべし。クスボルはクスブルの自動形なり。フスブル、フスポルはクスブル、クスボルに同じ。

クスブル 燒。弱き火力に燒くことなり。クスブルの意を借りて、生じたる語なるが如し。

シ、シムル(縮)意のシに、濁音のブを添ふれば、左の如き語を生ず。

シブ 澁。未熟の柿の汁、栗の中皮。

シブキ 澁。口を締むるが如き味ありて、滑らかに通り難き。

シブク 障。支へられて止まる。

シブル 澁。障りありて安らかに通らず。

ニ、ニブキ(鈍)意のニに濁音を添ふれば、次の如き語を生ず。

ニブキ 鈍。及切れの悪しき、覺りの遅き。

義 文

ニブル 鈍。のろく爲る、によく爲る。

ニピイロ 鈍色。鉛色。

ニゴル 濁。透明ならず。ニゴスは其他動形。

ニガキ 苦。

ヨ、ヨダレ(涎)のヨに濁音を添ふれば、次の語を生ず。ヨダレは口中よりヨヨと垂るゝ唾液なり。

ヨゴル 汚。ヨゴスは其他動形。

ケ、ケガレ(汚)のケは、其本義詳かならず。假りにケ(氣)に濁音のガを附して、ケガレの出で來りたるものと爲し置くべし。

ケガル、汚。不淨に爲る。

ケガスはケガル、の他動形にして、ケガラハシキは其れより出でたる形容詞なり。

ケ古言にして、通常の義なり。褻はケの衣なり。漢字の解にては、褻は私服なり。此字猥褻の褻と爲りて、穢の義あり。服の汚れてきたなく爲りたる移りたる轉義なるべし。我方にて漢字の轉義に従ひ、衣服のケの義を汚穢の義に移し、

之に濁音のガを附して、ケガレといふ語を作りたるには非ざるかと、疑問を起す者あり。されど其れにては、何故に私服をケノコロモと名づけしか、ケの音義解し難し。是れ本末倒置の説明なるべし。説文に褻は衣に従ふ執の聲とありて、私服は其本義にして、穢は其轉義なること前述の如し。我方にては順序を逆にし、穢の義を先として、之にケガレを當て、私服の義を後として、之にケガレのケを借りて、ケの衣と注したるものなるべし。斯くては語根のケは、其本義を逸して、褻の字を借る要を見ざるに至るなり。

ケガ、怪我は當て字なり。虧瑕の約轉なるべしと云ふ説もあり。古き語に非ず。ケガレ(汚)の語幹ケガの名詞と爲りたるものなるべし。血に染みたる傷は、不淨と考へられたるに由るか。

一定の意義ある語根又語幹の下に、補助音として濁音節を挿入し、新語を生ずる者多し。左に其例を擧ぐ。同語根又同語幹より出でたる、同系の清音の語を参考として其上に置く。

ア、アキナフ 商。 アガナフ 購。

ア、アツル 火に當つる。 アブル 灸。

藝文

イ、イキハフ 勢。

イドム 挑。

ウ、ウク 浮。

ウゴク 動。

オ、オコル 興。

オゴル 驕。

オ、オホフ 覆。

オボル、 溺。

キ、キル 切。

キザム 刻。

ケ、キルのキの轉。

ケヅル 削。

ナ、ナル、 狎。

ナヅム 泥。

ナ、 徐々の義あり。

ナブル 嘲弄徐々ぞ

ナジル 詰問徐々ぞ

ノ、ソス 伸。

ノブル 延。

ノ、ノス 伸前方。

ノゾム 望

ノゾク 臨

ノ、ノル 乘。

ノボル 登。

ハ、ハタク 敲。

ハジク 彈。

ハ、ハヌル 跳。

ハズム 乘勢。

ハ、ハヌル 除。

ハブク 省。

ハ、ハヤル 燥急

ハゲム 勵。
ハゲシキ 烈。

ヒ、ヒネル 拮。

ヒガム 僻。
ヒズム 歪。

ユ、ユルキ 緩。

ユヅル 讓。

ユ、ユルム 緩。

ユガム 歪。

同語根又同語幹より出でたる動詞の、二様の意義を生ずるとき、其語尾に清音と濁音とを附して、之を分つことあり。

語根ハ(間)

ハク 穿。

ハグル 矧。

語根ツ(粘液)

ツクル 着。

ツグ 接。

語根コ

濁音の用法

動詞の語尾には、當初より自然に濁音なる者あり、又音便にて濁音と爲れる者あり、其例は數多きが故省きて擧げず。

一般に音便の結果として生じたる濁音と、自然の濁音若しくは補助音として用ゐられたる濁音とは、周到なる注意を以て辨別せざる可からず。爰に一例を擧げて考査を試むべし。

シヅカ(靜)といふ語あり、シの音とツの音とを組み合はせて、如何に思慮を回らすとも、皆熟知する所の平靜といふ意義を探り出だすこと能はざるべし。此問題の解決は意外の處に在り。樹木のシタエダ(下枝は、エダのダを取ればシタエと爲る。文語にては之をシツエと言ふ、即ちシタ(下)のタの音便にて濁音のツに轉じたるなり。是に由つてシタはシツと爲る。物の水の下に降るをシツム(沈)といふ。シツムはシツ(下)の、動詞の形を取りたるなり。浮動物の沈みて、清水の下に落ち着きたるとき、流動の音は絶えて、全く平息の状態と爲る。此に於いてシツムのシツは、之に力を添へて、形容語幹のシツカ(靜)と爲る。即ち下のシツは、一轉して沈のシツと爲り、再轉して靜のシツと爲るなり。

シタの語根のシは既に下の義ありて、タは名詞を助くる接尾語なるに過ぎず。シタより轉じたるシツは賤民の義とも爲る、賤の女賤が家といふが如し。シツル、は零つるなり、滴るなり。シツク(零)は是より出づ。當初より濁音を有する語あり。此の如き起源にて語中に存する濁音は、容易に分析し難く、屢々其解釋に困難を感ずることあり。左に二例を擧ぐ。

タヅヌル(尋)は、語幹のタヅに、語尾のヌルを添へたる動詞なり。さてタヅより訪問又搜索の義を引き出だすべき手蔓無し。是も亦思ひ設けざる處に解決あり、タドタドは歩行の音なり。タドル(辿)はこのタドより生じたる動詞なるべきこと明かなり。タドの音をタヅに變すれば、忽ちタヅヌルの語幹を得。タドヌル又タヅヌルも、タドルと同じく、歩行の音より出でて、探り廻るといふ義を有する語なりと覺るべし。

モダスは黙して語らざるなり。モダの原意解し難し。分けて濁音ダの出處探るに由無し。言海にはモダはムナ(空)又ムダ(徒)に通すと云ふとの註あり。それにては兩者の間隔未だ相接近せず。モダスはモダユル(悶)に對する他動形なるべきか。モダユルは思絶ゆるなり。その對照は、絶ユルと斷ツとの、自他の關係の

如し。モダユルのダは、タユルのタの音便より起り、之をモダスのダに移したることゝ爲るなり。尙別解あり。ハツル、ハタス(果)イヅル、イダス(出)は、夫々自他相對する動詞なり。是より推して考ふるに、既にモダスといふ他動詞あり、之に對してモヅルといふ自動詞ありしも、夙くより失はれたるには非ざるか。今言はんとして言ふこと能はず、爲さんとして爲すこと能はずして、躊躇する舉動を、俗語にてモデモデすと云ふ。古へにも同様の語ありて、このモデの類より、モヅルの出でたることゝせば、最も能く自然に合ふ解釋と爲るべし。